ベラルーシにおける国民意識の混沌
―対ロシア統合の土壌を探る―

服部　倫卓

はじめに……44
1．データで見るベラルーシの国民像……46
⑴　対ロシア統合への国民の支持……46
⑵　ベラルーシにおける民族と国民……47
㈠　民族構成とアイデンティティー……48
㈡　言語事情……50
㈢　宗教事情……53
2．誰が対ロシア統合を支持しているのか……55
⑴　ベラルーシ社会のパラドクス……55
⑵　顕在化しないエスニック要因……56
⑶　ロシアではなくソ連……59
⑷　ソビエトに呪縛された国民……60
3．自己喪失と漠然たる同族意識……62
⑴　現地専門家の死角……62
⑵　自己喪失に陥った国民……64
⑶　漠然たる同族意識……66
4．情勢変化の兆し　―結びに代えて―……69

はじめに

今日、欧州の旧社会主義諸国は総じて、古典的な国民国家を形成・確立し、その単位でヨーロッパ主流文明への回帰・統合を果たそうとしていると言えよう。かつてソ連に組み込まれていた国々もその例外でなく、とくにバルト３国（エストニア、ラトヴィア、リトアニア）にはそれが典型的に当てはまる。ウクライナの動きは錯綜しているものの、同国も“諸国民の欧州”の予備軍であることに変りはあるまい。

これと反比例するように、バルト諸国やウクライナは、ソ連の継承国たるロシア連邦との関係を、あるいは希薄化させ、あるいは緊張させている。これらの国々では、言語・文化・教育面での民族化政策、言い換えれば非ロシア化政策が進められている。バルト諸国を除く旧ソ連構成諸国による独立国家共同体（Commonwealth of Independent States：CIS）の枠内での統合にも、大きな進展は見られない。

本稿で取り上げるベラルーシ共和国は、バルト諸国やウクライナと同じくヨーロッパとロシアの狭間に位置しており、地政学的条件は似通っているように思われる。しかし、近年の同国の歩みは、近隣諸国とは様相を異にする。1991年暮れにソ連からの独立を果たしてからしばらくは、言語を含め民族化政策が試みられたものの、それはすぐさま頓挫した。1994年の初の大統領選挙では、ロシアとの関係強化を唱えるルカシェンコ（LUKASHENKO A.）現大統領が圧勝した。1995年の国民投票の結果、ロシア語をベラルーシ語と並ぶ国家言語に格上げすることが決まった。ロシア・ベラルーシ両国は、1996年に「共同体」を結成、1997年にはそれを「連合」に格上げし、さらに1999年12月には「連合国家」を創設する条約が両国間で締結された。

ロシアが過去数年、政情不安、経済危機、チェチェン戦争に直面し、到底魅力的な伴侶とは思われないだけに、ルカシェンコ政権の対ロシア統合路線の特異性は一層際立つ。ベラルーシの民主派の間には、自国が帝国ロシアに再び飲み込ま

れ、せっかく手にした独立を失うことになりかねないとの不安感が根強くある。

1999年の国勢調査によれば、ベラルーシ国民のうち81.2%が民族上のベラルーシ人によって占められている。基幹民族の比率が８割強というのは、ソ連地域としては高い部類に入る。実はベラルーシは、これまでエスニシティに起因する本格的な武力衝突や分離主義運動が国内で一度も起きたことのない、旧ソ連の中では非常に希有な国である。そのような足枷がないのだから、国民国家の建設、ベラルーシ人によるベラルーシ人のための国造りにいそしみ、欧州への統合に邁進すればよさそうなものである。なぜ彼らはそうしようとせず、デフォルトや爆弾テロにまみれたロシアとの一体化を望むのか。

本稿では、ルカシェンコ政権が進めている対ロシア統合政策を念頭に置き、その背景としてのベラルーシ国民の国民意識を解明することを試みる。つまり、ベラルーシ国民が自分たちのことを何者とみなしており、彼らにとってロシアというものが何であるかという問題である。このテーマに関してはすでに現地専門家による議論の積み重ねがあるので[1)]、本稿はそれを踏まえつつ、1999年国勢調査や各種の世論調査をはじめとする最新のデータを駆使し、より精緻で実証的な分析をめざす。

まず、ベラルーシにおける対ロ統合に関連した国民世論を整理したのち、国勢調査および各種の社会調査結果にもとづいて同国の民族構成、言語事情、宗教事情等を概観する。ベラルーシ国民がかなりの程度“ロシア化”されている現実が確認されることになろう。その上で、こうしたファクターが国民の対ロ統合支持に実際につながっているかどうかを、現地専門家の見解を批判的に検討しつつ、論じていくことにする。これらの議論を通じ、ベラルーシ国民は必ずしもロシアそのものを無条件に好感しているわけではなく、熱心な統合支持者が欲しているのはむしろソ連の再興であること、また特徴的なのはベラルーシの国民意識にお

1）その代表例として、フルマン＝ブホヴェツ（FURMAN D., BUKHOVETS O.）による優れた論考（[12]）を挙げることができる。

ける“自己喪失”、ロシアとの漠然たる同族意識であり、ルカシェンコ政権はそれに付け込む形でロシアとの統合を進めてきたことが明らかになろう[2)]。

1．データで見るベラルーシの国民像

⑴ 対ロシア統合への国民の支持

ルカシェンコ大統領は日頃から、ベラルーシ国民の圧倒的多数は政権による対ロシア統合路線を支持していると繰り返し発言している[3)]。各種の世論調査結果を見ると、圧倒的多数という主張には明らかに無理がある。しかし、ベラルーシ国民の多数派がロシアとの統合の方向性を基本的に支持していることは紛れもない事実である。逆に言えば、欧州連合（European Union：EU）への加盟は一般国民の視野にはあまり入っておらず、北大西洋条約機構（North Atlantic Treaty Organization：NATO）加盟に至ってはほぼ論外と受け取られている。

ベラルーシの民間シンクタンクである社会・経済・政治独立研究所（Independent Institute of Socio-Economic and Political Studies：IISEPS）が2000年８月に実施した世論調査では、同国が今後とるべき対外戦略について、回答者の意見は次のように分かれている。①主権国家としてとどまりつつ、ロシアと連合関係を築くべき：38.0%。②EUに加入すべき：20.6%。③ロシアの中に入るべき：15.2%。④中立国としてとどまり、いかなる政治連合にも加入すべきでない：14.2%。⑤分からない・無回答：12.0%。欧州統合ではなくロシアとの特別な関

2）本稿では、ルカシェンコ政権がそもそも何のためにロシアとの国家統合を推進してきたかという点については立ち入らないことにする。ルカシェンコ大統領はベラルーシ・ロシア連合国家を創設し、その大統領の座に就く野望を抱いていると一般に指摘されていることだけ確認しておこう。この問題を含め、ベラルーシ・ロシア関係全般の展開については、拙稿（[38]）参照。また、両国間の経済関係については、拙稿（[35]；[36]）参照。

3）たとえば、1999年10月にルカシェンコ大統領がロシア連邦議会の国家院で行った演説を参照（[31]28 октября 1999)。

係に活路を見出そうとする国民が過半数を超えている。とくに、独立を返上してロシアに吸収されることを望む国民が15%もいるのが目を引く。なお、ベラルーシ・ロシア統合に関する国民投票が行われたら賛成するかという問いには、52.9%が賛成すると答えている[4)]。

別の調査機関「ノヴァク」が2000年３月に実施した世論調査の結果は、若干ニュアンスが異なる。すなわち、ベラルーシの対外政策路線としてどれが望ましいかという質問に対し、以下のような結果が出ている。①ロシアと西側を同時に志向する：38.8%。②ロシアとのさらなる統合：37.0%。③EUへの加入を志向する：15.5%。④分からない・無回答：8.7%[5)]。ここには、ロシア一辺倒路線へのためらいがにじみ出ている。それでも、二者択一を突き付けられれば結局ロシアに傾く国民の方が多く、ロシアに背を向けて欧州になびく立場が少数派であることに変りはない。

⑵　ベラルーシにおける民族と国民

それでは、ベラルーシ国民の対ロ統合への根強い支持は、どこから来るのだろうか。ルカシェンコ大統領に限らず、ベラルーシ・ロシア両国の統合推進派は、“兄弟”である両国民が一体化するのはごく自然であるとして、両国民の民族的な同族意識に訴えるのが常である[6)]。

実際、ベラルーシ人はロシア人と同じ東スラヴ民族に属し、言語的にもベラルーシ語とロシア語は同系統である。それのみならず、後述のようにベラルーシではロシア語を常用している国民が非常に多い。また、ベラルーシで支配的な宗

4）[30] No. 3, 2000, p. 9-10. なお、IISEPSの世論調査は毎回、全国の16歳以上の国民1,500人前後を無作為抽出して実施されている。その結果はIISEPSの機関誌（[30]）に一部が掲載される。

5）[15].

6）たとえば、４月２日の「ベラルーシ・ロシア国民統合記念日」を前にルカシェンコ大統領が国民に宛てたメッセージを参照（[31] 1 апреля 2000）。

教は東方キリスト教のロシア正教であり、宗教面でもベラルーシはロシアの多大な影響下にあると言える。一般に言語と宗教が民族・国民意識において死活的に重要であることは、衆目の一致するところであろう。ベラルーシ国民が民族的な同族意識ゆえにロシアとの統合を希求しているというのであれば、大変に合点の行く話である。

もっとも、やはり東スラヴ族に属し、同様に長年にわたってロシアからの強い影響にさらされてきたウクライナ人の場合は、言語・宗教ファクターが反ロ感情を育んでいる度合いの方が大きいであろう。近親性が求心力として働くかどうかは微妙な問題である。

以下ではこのような観点から、今日のベラルーシにおける民族・エスニシティ状況を、様々なデータを手がかりに探っていくことにする。

㈠ 民族構成とアイデンティティー

1999年２月、ベラルーシでは独立後初の国勢調査が実施された。これによれば、1,005万人の人口の民族別内訳は、ベラルーシ人が81.2%、ロシア人が11.4%、ポーランド人が3.9%、ウクライナ人が2.4%、ユダヤ人が0.3%等となっている。ベラルーシでは戦後、人口に占めるベラルーシ人比率が低下をたどり、1989年には77.9%となっていた。逆にロシア人が増加し、1989年現在で13.2%に達した。しかし、独立を挟んだ10年間でその流れが逆転し、今回の調査ではベラルーシ人比率が盛り返した形になっている[7)]。

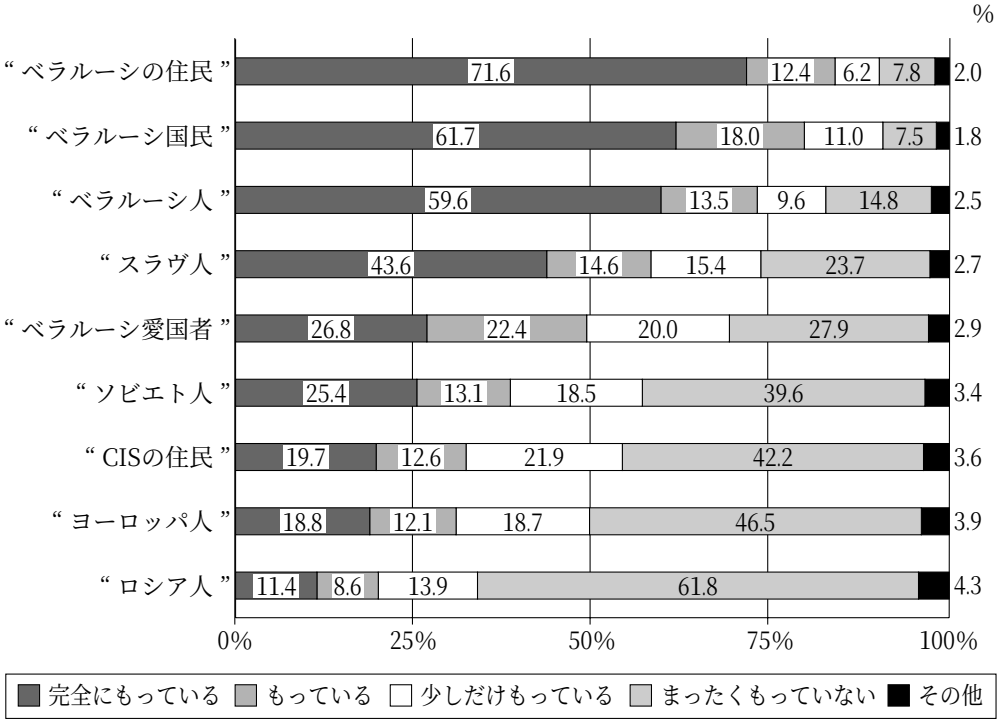
国勢調査における民族的属性はあくまで自己申告にもとづいている。過去10年間で起きた民族構成の変化は、実際に各民族集団が増減したというよりは、“ベラルーシ人”と申告する国民が増えた結果と見るべきであろう。このことからも、共和国の独立という現実が民族意識の一定の覚醒につながったであろうことが推察できる。

ただ、ベラルーシ国民が揺るぎない民族的・国民的アイデンティティーを確立

7）[24] pp. 136–137.

しつつあると速断するわけにはいかない。これに関連し、ベラルーシ科学アカデミー社会学研究所が興味深い社会調査を行っている（図―１）。この調査は、回答者に様々な属性を示し、それぞれについて、自分がそれに該当するという意識をどの程度もっているかを問うたものである。これを見ると、一見ベラルーシ民族・国民としてのアイデンティティーが支配的で、“ソビエト人”といった意識をしのいでいるかのようである。しかし、ソビエトという国はすでになく、彼らは現にベラルーシの国民であることを考えれば、むしろソビエト人というアイデンティティーの根強さにこそ注目する必要がありそうだ。また、国勢調査ではベラルーシ国民の81.2%が自分は民族的にベラルーシ人と申告しているにもかかわ

図―１　ベラルーシ国民の自意識



注）ベラルーシ科学アカデミー社会学研究所が2000年９月に全国の16歳以上の国民2,445人を無作為抽出して実施した社会調査の結果。それぞれの項目について、自分がそれに該当するという意識をどの程度もっているかを回答者に問い、それを集計したもの。

出所）ベラルーシ科学アカデミー社会学研究所から入手したデータをもとに筆者作成。

らず、ここでは“ベラルーシ人”という自意識を自信をもって表明している者は59.6%にとどまっている。81.2%というのは、目一杯背伸びをした数字ということになろう。逆に、国勢調査ではロシア人比率は11.4%にすぎないのに、“ロシア人”という自意識を大なり小なりもっている回答者が33.9%に上ることも見逃せない[8)]。ベラルーシ民族・国民というアイデンティティーが充分に確立されておらず、それがスラヴ人、ソビエト人、ロシア人といった意識に部分的に侵食されていることが見て取れよう。

ベラルーシにおける民族意識の特異性を物語るものとして、最近関係者の間で話題になったデータがある。2000年３月の世論調査で、「あなたの見るところ、ベラルーシ人とは何者か」と尋ねたところ、「三位一体のロシア民族のひとつ」とした回答者が42.6%に上り、「個別の自立した民族」という回答（49.8%）に肉薄したのである[9)]。これは、少なからぬ国民が、ベラルーシ人はロシア人の一亜種であると認めていることを意味する。

㈡　言語事情

1999年２月の国勢調査によれば、全国民の73.7%がベラルーシ語を自らの母語としており、ロシア語の24.1%がこれに次いでいる[10)]。ちなみに1989年に実施されたソ連最後の国勢調査ではそれぞれ65.6%と31.9%だったから[11)]、最近10年間でベラルーシ語の母語比率が拡大した形になっている。

しかし、ここで曲者なのは“母語”の意味である。ベラルーシの文脈で母語というのは必ずしも、幼児期に習得した最初の言語、あるいは日常話している言語を意味するものではない。母語意識と実際の使用能力・使用状況は大幅に乖離し

8）むろん、父親はロシア人、母親はベラルーシ人といった人も多いわけで、そうした個人が混合した自意識をもつことは不思議でない。今回の社会学研究所の調査結果によれば、配偶者のいる回答者のうち、29.2%が他民族の配偶者を有している。

9）［1］p. 22；［15］.

10）［24］p. 150.

11）［26］p. 88.

ており、ほとんどベラルーシ語を発したことがないような人までが国勢調査でベラルーシ語を母語に挙げるのである。だからこそ世論調査で、「あなたは自分の母語をどれくらい良く知っているか」といった変な質問が盛り込まれることにもなる[12)]。メチコフスカヤ（MECHKOVSKAYA　N.）はこれを、ベラルーシ語にあっては言葉本来のコミュニケーション機能よりも、「エスニック機能」の方が上回っているからだと解釈する。この場合エスニック機能とは、民族のシンボルとなり、国民を団結させ、自らを他のエトノスと区別する機能とされている[13)]。

ベラルーシ語の主な役割が実用的というよりは象徴的なものであるというのはそのとおりであろう。しかし、普通の国民がベラルーシ語を母なる言葉、ふるさとの言葉としてしっかりと胸に刻み込んでいるなどとは考えない方がいい。やや古いデータだが、1992年にゴメリ州で実施された意識調査の結果はとても示唆に富んでいる。すなわち、「あなたにとってベラルーシ語とは何か」と単数回答で尋ねたところ、次のような結果が出た。①自分の共和国の言語：41.4%。②自分の民族の言語：30.5%。③自分の両親が話している言語：7.8%。④自分が子供の頃話していた言語：5.4%。⑤自分が学校の授業で主に使った言語：4.0%。⑥自分が生活で主に使っている言語：4.0%。⑦自分が他のどの言葉よりも自由に操れる言語：2.0%[14)]。見事なまでに、いかにも“母語”らしいものほど下位に沈んでいる。これを見る限り、かけがえのないものが失われたという感覚はあまり強そうではない。どうもこの国では、ベラルーシに住む自分はベラルーシ人、その母語はベラルーシ語といった、たわいのない意識が支配的なようだ。

注目すべきことに、今回1999年の国勢調査で初めて、母語意識とは別に、日常的に家庭で何語を話しているかが問われた。その結果、日常的にベラルーシ語を話しているという国民は36.7%、それ以外にベラルーシ語を自由に使えるという

12）[29] No. 16, 2000.

13）[8] p. 308.

14）[21] p. 37.ちなみに、ゴメリ州のベラルーシ語母語比率は1989年66.5%、1999年75.2%で、全国平均を上回っている（[26] p. 88；[24] pp. 156-157）。

者も5.9%しかいなかった。ロシア語はそれぞれ62.8%と17.1%である[15]。国民の大多数がベラルーシ語を母語としながら、実際にそれを操れる者は42.6%にすぎず、ロシア語の79.9%に大幅に水を開けられているのである。ベラルーシにおけるロシア語化は、ソ連時代の国勢調査の“母語”指標によって示唆されていた以上に進行していたことになる。

ただし、ベラルーシの複雑な言語事情は、国勢調査のような二者択一ではとらえきれない面がある。ベラルーシ語とロシア語は似ているので、それらが無秩序に混じり合った“トラシャンカ”と呼ばれる混成語が、農村や地方で幅を利かせていることはその一例である。そこで筆者は、前出のIISEPSから入手したデータを独自に集計し、次のような結果を得た[16]。すなわち、日常会話で主に何語を使っているかという質問に対し、40.3%がロシア語、21.9%がロシア語とベラルーシ語の両方、32.4%がトラシャンカ、4.5%がベラルーシ語と答えている（その他・無回答が4.5%）。純粋なベラルーシ語の話し手は、国勢調査結果よりもずっと少数派であることが分かる。

それに関連して指摘すべきは、ベラルーシ国民は単にロシア語化されているだけでなく、独立後も今日に至るまで実質的にロシアの情報・文化空間にとどまり続けている点である。ベラルーシ国民の視聴しているテレビ放送のチャンネル別シェアは以下のとおりとなっている。①ロシア公共テレビ（ORT）：45.8%。②ロシア・テレビ（RTR）：25.2%。③ベラルーシ・テレビ（BT）：10.6%。④独立テレビ（NTV）：10.4%。⑤第８チャンネル：1.5%。⑥TV-6：1.0%。⑦クリトゥーラ：0.6%。⑧その他：4.9%[17]。このうち、ベラルーシの独自局は③と

15）［24］p. 151.

16）IISEPSでは定例の世論調査の際に、「あなたは日常会話で主に何語を使っているか」という質問を加えている。一回一回の調査結果には多少のぶれもあることから、筆者は1997年11月から2000年７月にかけての計７回の調査結果をIISEPSから直接入手し、独自に集計した。調査期間が２年以上にわたるという変則的なデータではあるが、計10,697人のサンプルを網羅しているので、信憑性が高いデータと自負する。

⑤の計12.1%だけで、残りは基本的にすべてロシア局である。それに比べれば新聞は地元独自のものが多いけれど、それでも2000年８月の世論調査によれば、読者数上位10紙のうち４紙がロシア系によって占められている[18]。

㈧　宗教事情

次に、宗教についてのデータを見てみよう。ベラルーシ国立大学が実施した社会調査では、回答者の55.6%が自分は正教に属すと答えている。以下、キリスト教全般：10.7%、カトリック：10.4%、プロテスタント：0.4%、イスラム教：0.2%、各種の東方宗教：0.2%、その他の宗教：0.3%となっている（残り22.2%は無回答）[19]。一方、すでに上で一部を紹介した社会学研究所の2000年９月の社会調査によれば、正教：77.5%、カトリック：9.0%、プロテスタント：0.9%、ユダヤ教：0.7%、イスラム教：0.1%、その他の宗教：2.0%という数字が出ている（残り9.8%は無回答）[20]。

ここで注目すべきは、今日のベラルーシにおいて宗教は、単に信仰の問題というよりは、個々人の文化的帰属意識と深くかかわっていることである。実は、上記の正教徒55.6%（または77.5%）といった数字には、有神論者だけでなく無神論者も含まれている。現に、ベラルーシ国立大のデータによれば、正教徒のうち礼拝に定期的に通っている者は14.9%しかいない。つまり、神を信じるか、実際に教会に通うか否かにかかわらず、今日ベラルーシ国民の大多数は自分を特定の宗派、その文化的環境と結び付けて考えているのである[21]。そうであるならばな

17）2000年８月の調査結果。サンプル調査にもとづき視聴者数×視聴時間の延べ時間からシェアを割り出したもの（［19］p. 1）。

18）［30］No. 3, 2000, p. 21.

19）ベラルーシ国立大学の社会・政治研究センターが1997年10月に全国の国民4,983人を無作為抽出して実施した社会調査の結果（［10］）。

20）ベラルーシ科学アカデミー社会学研究所が2000年９月に全国の16歳以上の国民2,445人を無作為抽出して実施した社会調査の結果。社会学研究所より筆者入手。

21）［10］p. 96.

おさら、ベラルーシの国民意識において宗教が果たしている役割も決して小さくないという推測が成り立ちそうだ。

そうした観点からも、ベラルーシにおける正教会の特異性を指摘せざるをえない。一般に、正教が主流の独立国には自前の正教会がある。ソ連時代から非合法の独立正教会が存在していたウクライナでは、国が独立を果たすのと前後する形でウクライナ独立正教会が正式に創設された[22)]。これに対し、ベラルーシにおける正教会は今なお、「モスクワ総主教教会ベラルーシ大主教管轄区域」として、ロシア正教会の支部の地位にとどまっている。すでに「ベラルーシ国民正教会」と称する民族主義教会が結成されてはいるが、政権当局から団体登録を拒否されるなど[23)]、広がりは見せていない。

以上のことから、ベラルーシ国民の過半数はロシア国民と共通の精神世界に属していると言って言い過ぎではあるまい。当地の正教会では、礼拝はもっぱらロシア語で行われる。参考までに、最高位のフィラレト府主教はロシア出身者である[24)]。ルカシェンコ政権はロシア正教を公然と国教化しつつあり、それを汎スラヴ主義的なイデオロギー攻勢の手段として利用している[25)]。世論調査によれば、あらゆる国家・社会機構の中でベラルーシ国民に最も信頼されているのはまさに正教会である[26)]。こうしたムードが民族的、国民的アイデンティティー、ひいては対ロシア感情に反映していないとは考えにくいのではないか。

22）[34] p. 168, pp. 219-220；[40] pp. 209-212.

23）[13] pp. 212-213.

24）[17] pp. 287-288.

25）[25] p. 81；[16] p. 385；[20] p. 324.

26）2000年９月の「ノヴァク」の世論調査によれば、正教会を完全に信頼するという回答者が39.8%、どちらかと言えば信頼するという者が37.8%で、計77.6%は他の追随を許していない（[23]）。

2．誰が対ロシア統合を支持しているのか

⑴　ベラルーシ社会のパラドクス

前節で見たように、ベラルーシでは“ベラルーシ人”、“ベラルーシ国民”というアイデンティティーがまだ充分に確立されておらず、ロシア国民への親近感を抱きやすい意識構造になっている。とくに、一般に民族・国民意識のカギを握ると考えられている言語と宗教の分野で、ベラルーシ国民はロシアの圧倒的な影響下に置かれている。ウクライナと異なり、ナショナリズムを育みうる民族語はあまりに地歩が弱く、民族宗教と呼べるものも基本的に存在していない。一見すると、このように半ばロシア化された国民がロシアとの統合を望むことに、何の不思議もないようにも思える。ところが、実際に検証を進めていくと、事態はそれほど単純でないことに気付かされる。

表―１は、IISEPSの世論調査で、「どのようなベラルーシ・ロシア関係が最も望ましいか」という質問に対する回答を、回答者の日常使用言語別に見たものである。驚くべきことに、回答者のロシア語度が高いほどロシアとの統合に乗り気でないという傾向が、くっきりと浮かび上がっている。ロシアとひとつ屋根の下で暮らしたいという向きは、ベラルーシ語住民の中にこそ多い。ウクライナのように、民族語の話し手ほど独立への気概が高いというパターン[27]は、少なくともこのデータからは読み取れない。一体この矛盾は、何によって説明されるのか。

もうひとつ、次のような不可解な事実がある。民族主義・反ロシア主義が弱いベラルーシで、かろうじてその地盤がある地域は、一般に首都ミンスク市とグロドノ州であると考えられている。しかし、前者ではロシア人が、後者ではポーランド人が多いため、両地域におけるベラルーシ人比率はそれぞれ79.3%、62.3%と、全国で最も低くなっている。逆に、モギリョフ州やゴメリ州のようなベラルーシ人比率が高い地域には、民族主義は微塵もない[28]。

27）［34］p. 37, pp. 211-215.

表―1　ベラルーシ国民の使用言語別の対ロシア統合への態度

（構成比、%）

	全回答者	日常主に使用している言語			
		ベラルーシ語	“トラシャンカ”	ベラルーシ語とロシア語	ロシア語
2つの独立国同士の善隣関係	42.4	32.3	39.0	44.0	44.8
独立国同士の連合	33.4	34.5	33.5	34.2	32.9
1つの国家への統合	21.8	31.5	25.6	18.7	19.7
その他・無回答	2.4	1.7	1.9	3.1	2.6

注）1999年11月のIISEPSの世論調査結果。「どのようなベラルーシ・ロシア関係が最も望ましいか」という質問に対する回答。

出所）IISEPSから入手したデータをもとに筆者作成。

⑵　顕在化しないエスニック要因

IISEPSのマナエフ（MANAYEV O.）所長は、ベラルーシの現状において言語は、民族・文化的ファクターというよりも、社会・人口学的ファクターであると喝破している[29]。つまり、ベラルーシではソビエト体制下で、農村主体だった社会が世界でもまれに見るテンポで都市化・工業化され、ロシア語化はそれと軌を一にする形で進展してきた。こうした経緯から、今日でもなおベラルーシ語を話しているのは主として農村居住者である（実際には農村でもロシア語の混じったトラシャンカの方が多数派だが）。彼らは高齢で教育水準が低い場合が多く、往々にして貧しい。こうしたベラルーシ語住民は非常に保守的で、ソ連的な生活様式に慣れきっており、ソ連再興を願うがゆえにロシアとの統合を支持するのである[30]。

28）地域別の民族構成については、[24] pp. 136–143. 地域ごとの民族主義の濃淡については、[16] pp. 184–225.

29）[5] p. 22.

30）[5] p. 22；[4] pp. 30–32.

これに対し、首都ミンスクを中心とする大都市は完全にロシア語社会になっており、民族語の伝統は失われている。しかしながら、知識水準が高く活力があるのも大都市である。それゆえ、ソ連復古的な政策に異を唱え、民主的で独立したベラルーシを擁護する向きも大都市に多い。ドラコフルスト（DRAKOKHRUST Yu.）はこの現象を、「ロシア語を話すベラルーシ民族主義」と呼んでいる[31]。

むろんベラルーシにも、民族主義的な信条ゆえにもっぱらベラルーシ語を用いている人たちは存在する。そうした向きは政党関係者や文化人に多いので、脚光を浴びやすい。しかし、国全体の規模で見れば、ベラルーシ語を話すベラルーシ民族主義者というのは、ほんの一握りの例外的な存在でしかない[32]。ベラルーシ語をしゃべることが、愛国心の発露というよりも、単に無教養の表われと見なされがちなのがこの国の現実である[33]。ベラルーシ語住民がロシア語復権推進者のルカシェンコ大統領を応援していることに象徴されるように[34]、端的に言って今日のベラルーシでは言語は政治の争点にすらなっていない。

それでは、宗教についてはどうだろうか。実はこれについても、ロシア正教という共通の宗教があるがゆえに、ベラルーシ国民が対ロシア統合を志向していると実証するのは難しい。

確かに、ベラルーシの宗教事情研究の第一人者であるノヴィコワ（NOVIKOVA　L.）が手がけた調査でも、正教徒、カトリック教徒、プロテスタントの間に様々な価値観の違いがあることが確認されている。しかし、ノヴィコワも指摘するように、こうした違いは信教そのものに由来するよりも、各宗派の民族構成や、社会・人口学的特徴に負うところが大きそうだ。ベラルーシの場合、カトリックではポーランド系住民の比重が大きく、プロテスタントでは若者信者が多

31）［4］pp. 30-32.

32）［4］p. 32.

33）［16］pp. 207-208；［18］p. 34.

34）［5］p. 22.

いといった傾向があり、宗派ごとの意識傾向の違いを決定しているのはそうした要因である公算が強い[35]。ノヴィコワは、個々人が対ロ統合のような争点への態度を決める上で、信教の要因は二次的ですらなく三次的であると言い切る[36]。

ここで、ベラルーシ国民の自意識を示した図―1を再度参照してみよう。社会学研究所は、回答者の信教別、民族別にもデータを集計しているので、筆者は各信教、民族グループごとの自意識の違いを分析してみた。その結果、正教徒の間では“スラヴ人”、“ソビエト人”、“ロシア人”といった、対ロ統合支持につながりうるような自意識が平均値よりも若干強いことが分かった。逆に、カトリックではそれらの意識が弱い反面、“ヨーロッパ人”というアイデンティティーが強い。しかし、客観的に見て、これも信教というよりは、正教徒にロシア人が多く、カトリックにポーランド人が多いという民族構成に由来するところが大きそうだ。

結局、今日のベラルーシでは、特定の民族・言語・信教集団が、その属性ゆえに対ロ統合を支持するという現象はほとんど確認できない[37]。ベラルーシ人が多い地域ほど独立護持の世論が強いという構図もない。そうした中、ポーランド人／カトリック教徒に対ロ統合への抵抗感が強いことは事実で、この争点でエスニック集団の要因が顕在化している唯一の事例と言える。とくに、国の西部に位置し、ポーランドと国境を接するグロドノ州では、ポーランド系住民の比率が24.8%に上る[38]。フルマン＝ブホヴェツによれば、これに加えてポーランドへの漠然とした帰属意識をもつカトリックのベラルーシ人も多く、こうしたポーランド／カトリック的な環境がベラルーシ民族主義を育む土壌となっている[39]。人口

35）［9］pp. 68-76；［22］pp. 197-208.

36）2000年10月30日、筆者の実施したノヴィコワに対するインタビュー。

37）さすがに、ベラルーシに居住するロシア人の間では、対ロ統合への支持がより強いと考えて差し支えないだろう。しかし、それを直接裏付けるデータは残念ながら入手できなかった。

38）［24］pp. 140-141.

39）［16］pp. 208-210.

に占めるベラルーシ人の比率が全国で最も低いグロドノ州が、ベラルーシ民族主義の最後の砦になっているのも、こうした事情による。

⑶　ロシアではなくソ連

このように、ベラルーシにおいて対ロシア統合の支持者を突き動かしているのは必ずしも、スラヴ人としての同族意識や、言語・宗教の共有感ではない。彼らの主たる動機はソ連復活願望に他ならないとの点で、現地専門家の意見は一致している。

その代表格であるマナエフは、対ロ統合の確信的な支持者が欲しているのは今日のロシアではないと論ずる。彼らにとって対ロ統合とは、ルカシェンコ政権下のベラルーシでとられている政治・経済モデルをロシアに輸出することによる、ソ連の再興に他ならない[40]。カルバレヴィッチ（KARBALEVICH V.）は、対ロ統合の前提として、ベラルーシ国民の間にはソ連の再建が可能だという神話が生き続けていると指摘している[41]。実際、ルカシェンコ大統領の確信的な支持者の実に４分の３がソ連復活を望んでいることに示されるように[42]、対ロ統合はもっぱらソ連再建の第一歩として歓迎されている感が強い。彼らは多民族のロシア国家を“旧ソ連の縮小版”ととらえているとする指摘もある[43]。

ベラルーシ国民がロシアの現状を非常に覚めた目で見ていることが、世論調査で裏付けられている。2000年４月の調査で、ベラルーシの暮らしがどの国のようであってほしいかを尋ねたところ、回答はドイツ（36.8%）と米国（17.8%）に集中し、ロシアを挙げた者はわずか1.2%であった。国外移住するとしたらどの国がいいかという質問でも、ドイツ（16.0%）と米国（10.1%）に人気が集まり、

40）［6］pp. 11-12.
41）［25］p. 187.
42）［5］p. 26.
43）［27］p. 26.

ロシアは2.3%にとどまっている[44]。新生ロシアの果てなき混乱を白眼視することにおいては、ベラルーシ国民は他国民と何ら変わらないのである。

興味深いことに、ベラルーシの暮らしがどの国のようであってほしいかという質問で、「ベラルーシ」という回答が18.7%に上っている。また、国外移住に関する質問では、どこにも移住しようと思わないという回答が意外にも57.4%を占めている[45]。ロシアの迷走を見下す一方、ソ連復古的な路線の下で構造危機の続く自国の現状については肯定している国民が結構多いのである。

一言で言えば、「ルカシェンコ大統領の支持者は、ソ連型社会主義の確信的支持者」（マナエフ）ということになろう[46]。旧ソ連の諸民族の中でベラルーシ人が最も典型的・模範的なソビエト人であったというのは定説と化している。そして、ベラルーシ人ほどソ連の中で居心地の良さを感じ、それゆえに独立への準備ができていない民族もなかった[47]。今日ベラルーシ国民の間に根強く見られる対ロ統合への積極支持は、まさに望まざるソ連からの独立に対する彼らの異議申立てに他ならない。

⑷ ソビエトに呪縛された国民

ベラルーシ人は歴史的に“ロシア化”にさらされてきたとよく言われる。しかし筆者は、ベラルーシ人が蒙ったのはむしろ“ソビエト化”ではなかったかと考えている。帝政時代から大ロシア人がベラルーシ人を自らに同化させようとしてきたことは紛れもない事実である。しかし、大ロシア人の純粋文化がベラルーシ人を完全に染め上げるには至らなかった。ベラルーシ人を真に改造し、今日もなお猛威を振るっているのは、ソビエト新文明である。ロシア語やロシア正教と

44）［30］No. 2, 2000, p. 9.

45）［30］No. 2, 2000, p. 9.

46）［5］p. 24.

47）［12］pp. 61–62；［25］pp. 56–63.

いった、一見するとロシアの文化と思われるものも、ベラルーシではソビエト的な形で根を張っている。

ルカシェンコ大統領はかつて、ベラルーシで広く浸透しているロシア語とベラルーシ語の混成語“トラシャンカ”について、次のように発言したことがある。この発言には、ベラルーシ国民のロシア、ソ連というものに対する意識がにじみ出ている。

> 我々はよく“ロシアの言語”のことで咎められる。一体どこが“ロシア”だと言うのだ。ソ連政権時代に我々が創り上げたものを、なぜ放棄しなければならないのか。つまり、純粋なロシア語というのは、我々が話しているものとは違うのだ。“トラシャンカ”だとか何とか言って、馬鹿にする人もいる。確かに“トラシャンカ”かもしれないが、そんなことはどうでもいい。それでも、我々はこの言葉を創ったのである。ロシア語を基盤としてだ。なぜそれを、今になって放棄しなければならないのか。これは、旧ソ連邦の枠内における族際共通語だ。ベラルーシ語ではウズベク人は理解できないが、ロシア語ならできるのである[48]。

つまり、ソ連イデオロギーそのままにロシア語を“族際語”と見なし、そこに民族の訛りが入ることを容認しているわけだ。想像するに、ロシア語が大ロシア人の固有言語としてベラルーシ国民に押し付けられてきたなら、今日の状況は少し違ったものになっていたかもしれない。それが、“ユーラシア族際主義”とでも言うべき進歩主義イデオロギーに導かれ、ベラルーシ社会の急激な近代化過程と連動してきたからこそ、ベラルーシ訛りを伴いつつも、ここまで強固に根を張ったのではないか。そのように考えると、トラシャンカを「ソビエト全体主義の新言語」とする識者の指摘[49]も、あながち誇張ではない気がしてくる。

48）[31]26 ноября 1998.

同様のことは、宗教についても言える。ルカシェンコ政権が今日、ロシア正教を事実上国教化しつつあることは公然の秘密である。しかし、ルカシェンコ大統領が「正教無神論者」と揶揄されているように[50]、それは決して信仰上の衝動に駆られたものではない。あくまでも、国民を操作し、とくにロシア世界への帰属意識を植え付けて統合の糧にしようという世俗的な動機にもとづいている。その意味で、ソ連時代の国家と正教の関係と通底するところがある。

3．自己喪失と漠然たる同族意識

⑴ 現地専門家の死角

これまでの検証で明らかになったように、ベラルーシの対ロシア統合支持者を突き動かしている直接的な動機は必ずしも民族的な同族意識ではない。彼らはロシアにソ連の幻影を見ているにすぎず、今日のロシアについてはむしろ否定的に受け止めている。

さて、問題はベラルーシ国内の識者らによる、言語や宗教といった要因が対ロ統合世論の形成にまったく寄与していないかのような議論である。筆者は、現地専門家のそうした分析はやや一面的であり、誤解を招く恐れがあると考えている。確かにベラルーシでは、ロシア語住民やロシア正教徒ほど対ロ統合を支持するといった明快な図式はない。しかし、私見によればそのことは決してベラルーシにおける国民意識、ひいては対ロ世論を考える上で、言語や宗教といった要因を無視していいということではない。むしろ、そうした要因をより深く掘り下げ、全体の中に正しく位置付けてこそ、この国の混沌とした国民意識、さらにはアンビバレントな対ロ感情を浮き彫りにすることができるというのが、筆者の立場である。

49）［11］p. 13.

50）［16］p. 208.

実はIISEPSでは、対ロ統合に関し国民を①“確信的賛成者”、②“揺れ動く多数派”、③“確信的反対者”の３グループに分類するという分析手法をとっている。表－２に見るように、①と③はそれぞれ有権者の４分の１程度で推移しており、残りは中間派によって占められるという構図が定着している。IISEPSが詳細な分析を加えているのは、主に①と③である。このように支持者・反対者を狭く定義するのは、その方がそれらの傾向性をより明瞭に描き出せるからである。ベラルーシ語住民ほど統合を熱心に支持するという興味深い発見も、こうした分析の過程で得られたものだった[51]。

しかし、現実の政治力学に照らすと、こうした分析手法は問題なしとしない。なぜなら、これまでルカシェンコ政権は①の確信的賛成者に加え、②の中間派についても統合に前向きであると恣意的に解釈し、仮想の国民的合意に依拠して対ロ統合を断行してきたからである[52]。中間派は、対ロ統合を熱狂的に支持するわけではないが、さりとて絶対反対でもない人々である。ベラルーシの現状では、政権側からの情報操作や圧迫を受け、容認か沈黙ということになりがちだ。したがって、彼らが積極的な統合支持ではないにしても容ロシアである点が、実は死

表－２　対ロ統合に関する確信的賛成者と反対者

（構成比、％）

有権者の類型	1999年３月	1999年11月	2000年４月	2000年８月
①“確信的賛成者”	23.5	20.1	24.0	21.0
②“揺れ動く多数派”	48.2	53.8	54.3	58.2
③“確信的反対者”	28.3	26.1	21.7	20.8

注）IISEPSが定期的に実施している世論調査にもとづく。「どのようなベラルーシ・ロシア関係が最も望ましいか」、「ベラルーシとロシアの統合に関する国民投票が今日実施されたらどのように投票するか」という２つの質問の回答を複合的に見たもの。①“確信的賛成者”は、ベラルーシとロシアを１つの国に統合することが望ましいと答え、なおかつ国民投票で賛成するつもりの回答者。③“確信的反対者”は、両国関係は独立国同士の善隣関係であるべきだと答え、なおかつ国民投票で反対するつもりの回答者。それ以外はすべて②となる。

出所）［６］p. 6；［30］No. 3, 2000, p. 9.

51）［６］.

活的なのである。筆者は、ベラルーシ国民がロシアに漠然たる同族意識を抱いていることが、それを可能にしていると考えている。その土壌をつくっているものこそ、言語、宗教、文化、歴史観といった諸要因であるというのが、筆者の仮説である。

⑵ 自己喪失に陥った国民

表―３は、「あなたが“我々の祖国ベラルーシ”のことを考える時に真っ先に連想されるのは何か」という質問に対する回答をまとめたものである。典型的な国民国家であれば、言語、宗教、歴史などを挙げる者が多いのではないだろうか。しかし、ベラルーシの場合“祖国”からそうしたものを連想する国民は多くない。他方、米国のような理念型の国では国旗・国歌や歴史上の偉人にも回答が集まると予想できるが、ベラルーシではそうした意識はきわめて弱い。

結局、祖国ベラルーシというものに、自分の生まれ育った場所という以上のイメージをもてない者が非常に多いのである。前掲の図―１で、“住民”という意識が最も優勢になっているのも決して偶然ではない。ベラルーシというものへの帰属意識が地理的なものに限定され、その他の要素によって補強されたり神秘化されたりしなければ、国民意識が微弱で不安定になるのも当然である。そうした観点から図―１を改めて眺めると、“ベラルーシ愛国者”を自任する者が少ないことに気付く。ロシア世界では“愛国者”という言葉がとても良い響きをもつにもかかわらずである。

52）たとえば、ロシア国家院における演説でルカシェンコ大統領は、ベラルーシとロシアを単一国家に統合すべきだとの立場を公然と表明し、ベラルーシ国民はすでに国民投票で圧倒的多数により統合に関する態度を明確にしていると述べている（[31]29 октября 1999）。しかし、前掲の表―１に見るように、ベラルーシとロシアを１つの国に統合することを望んでいる有権者は圧倒的多数ではなく、４分の１以下である。さらに言えば、1995年の国民投票でベラルーシ国民が是認したのは、「ロシアとの経済統合に向けられた大統領の活動」であった。

冒頭で述べたように、人口に占める基幹民族の比率が８割を超えるベラルーシは、一見すると旧ソ連の中では国民国家を建設していく上でかなり有利な条件を抱えているように思える。しかし実際には、それに寄与しうる言語・宗教・歴史等が、ベラルーシにおいては要因としてほぼ欠落している。独自の民族性を体得するに至らず、ソビエト人というお気に入りのアイデンティティーも否定され、今日ベラルーシ国民はある種の自己喪失に陥っていると言えよう。

歴史的に言えば、ベラルーシで言語や宗教といった要因は、国民国家の形成を促すよりは、むしろ妨げになってきた。ベラルーシでは、正教はロシアによる、カトリックはポーランドによる住民の同化手段だった経緯があり、それらの信教に属すことは自分を民族的にもロシア人やポーランド人と同一視することにつな

表―３　ベラルーシ国民の“祖国”イメージ

（%）

１．自分が生まれ育った場所	69.8
２．我々が住んでいる国家	28.0
３．我々の土地、領土	22.3
４．ふるさとの自然	20.2
５．ベラルーシ国民の勤勉性、慎ましやかさ	20.1
６．ベラルーシ国民の精神的資質	17.5
７．ふるさとの墓、記念碑	12.6
８．我々の過去、歴史	10.7
９．ベラルーシ語	9.3
９．ベラルーシの歌、祭日、習慣	9.3
11．我々の信教、宗教	6.6
12．国民の創造的能力	3.6
13．国旗、国章、国歌	3.3
14．ベラルーシの偉人たち	2.9
15．その他	0.8

㈜　ベラルーシ科学アカデミー社会学研究所が1999年10～11月に全国979人の成人国民を無作為抽出して実施した意識調査の結果。「あなたが“我々の祖国ベラルーシ”のことを考える時に真っ先に連想されるのは何か」という質問に対する回答。該当するものすべてを挙げる複数回答。

（出所）［29］（No. 17, 2000）およびベラルーシ科学アカデミー社会学研究所から入手した資料をもとに筆者作成。

がりがちだった[53]。今日でも、ベラルーシの正教会ではもっぱらロシア語が、カトリックでは主としてポーランド語が礼拝で用いられ、主要宗派の中にベラルーシ語を主体とするものがないという問題がある。民族教会として発展する可能性があったユニエイト教会（ギリシャ・カトリック教会）は、ベラルーシの領域では帝政ロシア時代の1839年に消滅し、今日その再建運動は目立った成果を挙げていない[54]。

⑶ 漠然たる同族意識

マナエフらベラルーシの論客が、ロシア語住民ほど実は進歩的とことさらに主張している背景として、この国の経験してきた悶着を知る必要がある。つまり、1990年代前半、当国では急進的なベラルーシ語化政策が試みられた。その推進者たちは、ベラルーシ語住民こそ自由・独立ベラルーシの担い手であると唱え、ロシア語住民はロシアの回し者であるかのような偏見を振りかざしたのである[55]。マナエフらの主張は、そうした現実離れしたベラルーシ語賛美論への反動という一面をもっている。さらに言えばここには、この国の知識人の間で続いている論争、すなわちベラルーシの国民概念を何に求めるべきか（民族の固有文化か、普遍的価値か）という論争が投影されている。

確かに、ベラルーシではロシア語住民ほどロシアとの統合に反対する者が多いという奇妙な現象が見られる。しかし、それはあくまでも、ロシア語を話しているにもかかわらずであり、ロシア語を話しているがゆえにではないだろう。もしも彼らにとってロシア語やロシア正教がまったくの異文化であったなら、アレルギー要因がさらに増え、対ロ統合への拒絶反応は一層激しいものになるはずだ。ところが、ベラルーシにはロシア語もロシア正教も空気のように存在し、ロシア

53）［3］pp. 36–37.

54）［16］p. 385；［20］pp. 315–335.

55）2000年5月22日、筆者の実施したマナエフに対するインタビューにもとづく。

発の情報や文化が蔓延している。そうしたものがあまりにも当たり前に存在しているため、その影響を検証するのが困難なほどである[56]。

こうした状況では、ベラルーシ国民がロシア国民を他者ととらえることにはなりにくい。国民は、自己喪失と表裏一体のものとして、ロシアとの漠然たる同族意識を抱くことになりがちである。その下地があるので、民主的で独立したベラルーシを望み、対ロ統合にはっきりとした反対意見をもっている一部の国民層（前出の“確信的反対者”）にしても、強烈な反ロ感情を抱くことはまずない。増してや国民の多数派は、対ロ統合を熱烈に歓迎しないまでも、絶対反対ということにもならない。

ルカシェンコ政権のイデオロギーは、ソビエト主義に汎スラヴ主義を接ぎ木した特異なものと指摘されている[57]。汎スラヴ主義を掲げているねらいは、まさにこの漠然たる同族意識を定着させ強化する点にあるはずだ。だからこそルカシェンコ大統領は、ロシア語の国家言語化、ロシア正教の事実上の国教化に血道を上げてきたに違いない。

興味深いことに、2000年４月の世論調査によれば、ロシアを自国にとっての脅威ととらえているベラルーシ国民は5.9%しかいない[58]。しかし、様々なデータから見て、国民がチェチェン紛争をはじめとするロシアの物騒な諸事件を深く憂慮していることは間違いないのである[59]。それでも国民が客観的にロシアを脅威

56）筆者はマナエフに対し、ベラルーシにおいてロシア語使用者が対ロ統合を支持するという対応関係がないにしても、ベラルーシとロシアが事実上言語を共有していることは、やはり両国の統合にとってきわめて重要な前提条件となっているのではないかと指摘してみた。これに対しマナエフは、それは当然のことである、自分が言いたかったのは言語ファクターを絶対視してはならないということであり、それを過小評価するのも同じように誤りである、旨述べた。2000年11月８日、筆者の実施したマナエフに対するインタビュー。

57）[25] pp. 81-82.

58）[30] No. 2, 2000, p. 9.

59）[２] p. 58；[30] No. 4, 1999, pp. 20-21.

と見なさないというのは、ロシアという国を自国とは別のものとして考えることができない表われではないか。

漠然たる同族意識が生み出すのは、統合に対する曖昧な態度である。すでに見たように、2000年８月の世論調査で、国民投票が実施された場合にロシアとの統合に賛成すると答えた回答者が52.9%に上った。他方、同じ調査で、ベラルーシが主権・独立国家にとどまることを望むかと尋ねたところ、62.9%が「望む」と答えている[60]。つまり、少なからぬ回答者が統合と独立を同時に欲していることになる。こうした傾向を、ベラルーシ世論の非合理性ととらえる分析もある[61]。

筆者は、基本的にそうした評価に同意しつつ、次のような点も指摘しておきたい。上述のように、“ソビエト人”に代るべき“ベラルーシ国民”というアイデンティティーは未確立である。これは、独自の国民・国家として処してゆく気構えが弱いということを示唆している。私見によれば、今日ベラルーシ人の国民意識はある種のモラトリアム状態にある。つまり、ロシアによって提供される公共財（ロシアの場合エネルギー資源も含まれる）、市場、文化・情報ソフト等については、これまでどおり最優先で分配に与りたい。しかし、それに伴う義務や災厄、たとえばチェチェンで従軍するようなことは避けたい。結局、完全な統合でも一本立ちでもなく、あやふやなままロシアにぶら下がっている今のような状態が、実はベラルーシ国民にとって最も都合が良いのではないか。そう考えると、一見非合理とも受け取れる世論にも、それなりの論理が秘められているように思えるのである[62]。

60）[30] No. 3, 2000, p. 8.

61）[30] No. 4, 1999, p. 21.

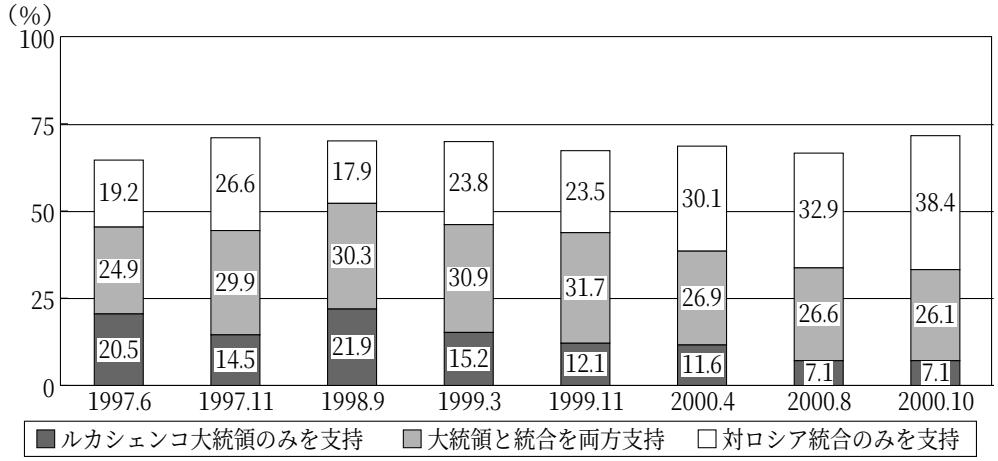
62）現地専門家の中ではカルバレヴィッチが、統合に関するベラルーシ世論が非合理的であると指摘しつつ、筆者と同じように、ベラルーシ国民の多数派にとっては曖昧な状態こそが最も好ましいと指摘している（[25] p. 83-84, p. 188）。

4．情勢変化の兆し　―結びに代えて―

以上見てきたように、ベラルーシにおいて対ロシア統合の中核的支持層になっているのは、ソ連再興を夢見る守旧派の有権者である。そこにおいて、言語や宗教といった民族的な要因が果たしている役割はミニマルであった。しかし、社会全体を貫いているのは民族・国民としての自己喪失であり、またそれと表裏一体のロシア国民との漠然たる同族意識である。言い換えれば、ベラルーシの場合その見かけとは異なり、国民国家としての内実があまりに乏しい。やや陳腐な結論になってしまうが、言語・宗教をはじめ多方面にわたるいわゆるロシア化がベラルーシの国民意識と対ロ感情に及ぼしている影響は甚大と言うべきであろう。ルカシェンコ大統領はこうした状況に付け込み、自らの政治的野心が赴くままにロシアとの統合を推進してきたのである。

はたして、今後ベラルーシにおける国民意識はどのように移り変わり、それに

図―２　大統領と対ロ統合の支持者（一致と乖離）



注）IISEPSの世論調査にもとづく。この場合、ルカシェンコ支持者とは大統領選で同氏に投票する用意があると答えた回答者。対ロ統合支持者とは、「どのようなベラルーシ・ロシア関係が最も望ましいか」という質問に対し、「独立国同士の連合」または「１つの国家への統合」と答えた回答者。

出所）IISEPSから入手したデータにもとづき筆者作成。

もとづいてベラルーシはいかなる対ロ関係を築いていくのだろうか。そのような展望を描こうとする際に、ルカシェンコ大統領や対ロ統合の確信的支持者、反対者の動きに注目してもあまり有用な手がかりは得られない。いずれにしても彼らは少数派であり、短中期的に大きく増減するということもあまりないからである。それに対し国民の多数派は、無定見と言えばそれまでだが、逆に言えば状況に敏感に反応し、そこには今後の方向性をうかがわせる萌芽が秘められている。現実の政治力学においても、最終的にはそうした多数派の国民にこそ国の選択がかかっているはずだ。そこで、ここではルカシェンコおよび対ロ統合の支持者をあえて広義にとらえ、そのトレンドにもとづいて若干の将来展望を試み、本稿の締め括りとしたい。

図―２は、IISEPSの世論調査結果をもとに、大統領と統合の支持者が重なり合う度合いを時系列的に追ったものである。これを見ても分かるとおり、ルカシェンコ支持者と対ロ統合支持者を広くとらえれば、元々両者が完全に一致していたわけではなかった。そして、2000年に入ってから、対ロ統合は支持するがルカシェンコは支持しないという国民が顕著に増加している。筆者の見るところ、その原因は国内には見出しがたい。考えられる原因はただひとつ、ロシアにおけるプーチン（PUTIN V.）政権の誕生である。

筆者の仮説は次のようなものである。ロシアの情報空間に間借りして生きているベラルーシ国民は常に、無意識のうちに自国の大統領をロシアのそれと比べている。晩年のエリツィン（YELTSIN B.）ロシア大統領に比べれば、ルカシェンコ大統領の方が若く活動的で、多くのベラルーシ国民が後者の方を好ましいと感じたとしても不思議ではなかった。ロシア要因はそうした面でもルカシェンコ大統領にとってプラスだったのである。外国の主な国家元首の中で、最も好感がもて、理想に近いのは誰かというアンケート結果の推移を見ると、ベラルーシにおけるエリツィン大統領への支持は政権末期には３％前後に落ち込み、最下位が定位置になっていた[63]。

ところが、さすがにベラルーシ国民の間にもルカシェンコ氏への飽きが広がり

始めた。まさにその矢先に、ロシアでプーチン政権が成立した。同じように若くてエネルギッシュでありながら、ルカシェンコ氏よりも高い知性と風格を漂わせた大統領の登場である。ベラルーシ国民の共感が一気にプーチン大統領に傾き、それにより対ロ統合の支持率が伸張する一方、ルカシェンコ大統領の支持率は低下した。図に見るように、2000年10月現在で、ルカシェンコ大統領の支持率が計33.2%（7.1%＋26.1%）であるのに対し、ルカシェンコ抜きでの対ロ統合の支持者が38.4%に上っている。

つまりルカシェンコ氏にとって、ロシアの大統領と比べられることが逆に不利になったのである。これまで国内にライバルをもたなかったルカシェンコ大統領が、今やプーチンの幻影に脅かされている。プーチン氏が直接2001年のベラルーシ大統領選に立つわけではないが、再選をめざすルカシェンコ大統領にとってプーチン要因は、野党や西側よりも潜在的にはるかに脅威であるに違いない。現に、2000年９月の世論調査で「ベラルーシ大統領選で誰に投票するか」と問い、選択肢にプーチンを加えたところ、早速同氏を挙げた回答者が8.2%に上っており、ルカシェンコの39.0%に次いで２位につけている[64]。

ルカシェンコ大統領はかつて、ベラルーシ・ロシア連合国家に大統領制を導入し、それを両国民の直接投票で選出すべきだと主張していた。大統領は、脱エリツィンの展望が見えない1999年までのロシアの状況をにらみ、自らの勝ちを計算していたに違いない[65]。当時、少なくともベラルーシ国内の世論調査では、連合大統領選が実施されたらルカシェンコを支持するという国民が多かった[66]。しかし、この構図もプーチンの登場で覆った。2000年８月のベラルーシの世論調査では、連合大統領選でプーチンに投票するという有権者が41.4%、ルカシェンコに

63）［30］No. 4, 1999, p. 44.

64）［23］.

65）［38］.

66）［30］No. 4, 1999, p. 20.

67）［30］No. 3, 2000, p. 9.

投票する有権者が19.5%である[67]。ロシア国民については推して知るべしであろう。この力関係が今後も続くのなら、対ロ統合の推進はルカシェンコにとって無益であるだけでなく、危険きわまりないものになる。

ベラルーシでは従来、ロシアがベラルーシよりも民主化や市場経済化で先行しているからといって、民主・市場派のベラルーシ国民が対ロ統合を支持するようなことはまずないという見方が有力だった[68]。しかし、2000年に入ってからの統合支持者の急増は、従来とは異なる支持層の出現を意味するものとも受け取れる。むろん、これはプーチンの個人人気に負うところが大きく、ロシアおよびプーチンを幾多の困難が待ち受けていることを考えれば、一過性のブームに終わる可能性も高い。それでも、もし仮にプーチン政権がロシアの安定的な発展に一定の道筋をつけられれば、従来のようなソ連復活という後ろ向きの意味合いではなく、ロシアが新たな装いでベラルーシ国民を引き付けることになるシナリオも、まったく考えられないわけではない。

もっとも、ベラルーシで親ロシア・ムードが盛り上がっても、それが実際の統合に直結するわけではない。1999年12月の連合国家創設条約の締結にもかかわらず、ベラルーシとロシアは必ずしも国家統合を深化させているわけではなく、むしろ普通の二国間関係に後退している面もあり、プーチン政権の成立を境にそうした傾向がより顕著になっているというのが、筆者の基本的な認識である[69]。ましてや、対ロ統合の推進がルカシェンコ大統領にとって危険と化しているとなると、2001年大統領選におけるルカシェンコ再選が有力視されるにしても、その後の同政権の出方は読みづらい。

いずれにせよ、隣国に英雄が出ただけで、その国との統合に前向きな世論が簡単に高まってしまうこと自体、いかにベラルーシの国民意識がか細く、周縁意識が支配的かを物語っている。ベラルーシ国民が自らのアイデンティティーを確立

68）［30］No. 1, 1998, p. 32.

69）［38］.

しようとする際に、およそロシアという存在を避けて通ることはできない。ベラルーシ人の国民意識がどう発展していくかは、実はかなりの程度そのロシアがどうなるかに依存している。エリツィン時代の終焉とプーチン政権の成立に伴い、ベラルーシにおける国民アイデンティティーの模索も未知の新領域に入ったと言える。

（筆者は在ベラルーシ共和国大使館専門調査員）

参考文献

［1］ Вардомацкий А.,“ Беларусь и мир: Социологическоеисследование,” *Аналитический бюллетень Белорусской ассоциации фабрик мысли.* -Мн., No. 2 [9], 2000.

［2］ Вардомацкий А.,“ Результаты мониторинга общественного мнения,” *Аналитический бюллетень Белорусской ассоциации фабрик мысли.* -Мн., No. 2-3 [5-6], 1999.

［3］ Голубев В.,“ Конфессиональный фактор в проблеме формирования национального самосознания белорусов,” *Аналитический бюллетень Белорусской ассоциации фабрик мысли.* -Мн., No. 3 [10], 2000.

［4］ Дракохруст Ю.,“ Белорусский национализм говорит по-русски,” *Новости НИСЭПИ.* -Мн., No. 1 [7], 1998.

［5］ Манаев О.,“ Белорусский электорат: за и против президента,” *Аналитический бюллетень Белорусской ассоциации фабрик мысли.* -Мн., No. 1 [1], 1998.

［6］ Манаев О.,“ На Востокили на Запад?,” *Аналитический бюллетень Белорусской ассоциации фабрик мысли.* -Мн., No. 4 [7], 1999.

［7］ Манаев О.,“ Беларусь-2000: Почему нет перемен?,” *Аналитический бюллетень Белорусской ассоциации фабрик мысли.* -Мн., No. 3 [10], 2000.

[8] Мечковская Н.,“ Языковая ситуация в Беларуси: этические коллизии двуязычия, ” *Russian Linguistics*, No. 018, 1994.

[9] Новикова Л.,“ О специфике ценностных ориентаций и социальных установок верующих основных христианских конфессий,” *Социология* –Мн., No. 1, 2000.

[10] Новикова Л.,“ Основные характеристики динамики религиозности населения Республики Беларусь, ” *Социологические исследования* –М., No. 9, 1998.

[11] Снапковский В.,“ Массы и лидеры: тенденции развития общественного сознания и формирования новых лидеров в Беларуси, ” *Новости НИСЭПИ.* –Мн., No. 2 [4], 1997.

[12] Фурман Д., Буховец О.,“ Белорусское самосознание и белорусская политика, ” *Свободная мысль.* –М., No. 1, 1996.

[13] *Актуальная статистика 2000: Сборник научных трудов: ТОМ 1*, Научно –исследовательский институт статистики при Министерстве статистики и анализа Республики Беларусь. –Мн., 2000.

[14] *Аняменне: з хронікі знішчэння беларускай мовы*, Таварыства беларускай мовы імя Францішка Скарыны, Gudas. –Вільня, 2000.

[15] *Беларусь и мир: результаты опроса общественного мнения*, НОВАК –Мн., 2000.

[16] *Белоруссия и Россия: общество и государство*, Под ред. Фурмана Д., Изд. Права человека. –М., 1998.

[17] *Белоруссия: путь к новым горизонтам*, Под общей ред. Кожокина Е., Изд. РИСИ. –М., 1996.

[18] *Белорусы*, Российская Академия Наук, Институт этнологии имени Н. Н. Миклухо –Маклая, Изд. Наука. –М., 1998.

[19] *Исследование аудитории по средствам массовой информации:*

Телевидение и радио: 31 июля -27 августа 2000 года, НОВАК. -Мн., 2000.

[20] *Канфесіі на Беларусі (к. XVIII-XX ст.)*, Пад. рэд. Навіцкага У., ВП Экаперспектыва. -Мн., 1998.

[21] *Межнациональные отношения в Восточно-Полесском регионе Беларуси (Материалы изучения мнения населения Гомельской области)*, Гомельский социологический центр, Изд. Радзімічы. -Гомель, 1993.

[22] *Молодежь и гражданское общество: белорусский: вариант*, Под ред. Манаева О., Изд. В. М. Скакун. -Мн., 1999.

[23] *Мониторинг общественного мнения Республики Беларусь: 12-20 сентября 2000 года*, НОВАК. -Мн., 2000.

[24] *Население Республики Беларусь: Итоги переписи населения Республики Беларусь 1999 года*, Министерство статистики и анализа Республики Беларусь. -Мн., 2000.

[25] *Национально-государственные интересы Республики Беларусь*, Под ред. Заико Л., Изд. В. М. Скакун. -Мн., 1999.

[26] *Национальный состав населения СССР: По данным Всесоюзной переписи населения 1989г.*, Государственный комитет СССР по статистике, Изд. Финансы и статистика. -М., 1991.

[27] *Особенности социокультурного развития различных социальных групп населения Беларуси в условиях обретения ею государственной независимости*, Национальная Академия Наук Беларуси, Институт социологии. -Мн., 1999.

[28] *Типология двуязычия и многоязычия в Беларуси*, Национальная Академия Наук Беларуси, Институт языкознания имени Якуба Коласа, Белорусский республиканский фонд фундаментальных

исследований, Изд. Беларуская навука. -Мн., 1999.

[29] *Зеркало*. -Мн.

[30] *Новости НИСЭПИ*. -Мн.

[31] *Советская Белоруссия*. -Мн.

[32] 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編 『新版世界各国史20：ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998年。

[33] 黒田龍之助 「似ているが故の悲劇―ベラルーシ言語文化事情―」 中澤英彦編 『ポストソヴィエト期の社会と文化受容について―スラヴ、とくにウクライナ、ベラルーシ地域における―』 1999年、13～36ページ。

[34] 中井和夫 『ウクライナ・ナショナリズム―独立のディレンマ―』 東京大学出版会、1998年。

[35] 服部倫卓 「ベラルーシの対ロシア経済関係の実相(1)―秘められたコメコン再興の野望―」『ロシア東欧貿易調査月報』 1999年１月号、47～70ページ。

[36] 服部倫卓 「ベラルーシの対ロシア経済関係の実相(2) ―秘められたコメコン再興の野望―」『ロシア東欧貿易調査月報』 1999年３月号、10～53ページ。

[37] 服部倫卓 「エリツィン後への道筋をつけたロシア下院選挙―政権交代に向けた流れを地方の動きで検証―」『ロシア東欧貿易調査月報』2000年１月号、42～94ページ。

[38] 服部倫卓 「ベラルーシ・ロシア連合の虚像と実像」 ㈳ロシア東欧貿易会・ロシア東欧経済研究所編 『カントリー・リスク情報調査―CIS諸国の対外関係の再編―』 2000年、1～23ページ。

[39] 服部倫卓 「言語ジャーナル：ベラルーシ」『月刊言語』 2000年12月号、74～75ページ。

[40] 廣岡正久 『ロシア正教の千年―聖と俗のはざまで―』 日本放送出版協会、1993年。